

公共工事には在来植物の植栽を

原風景の島を謳い文句にしている伊平屋島に海浜植物の調査に行った際に、非常に残念に感じたことがある。島の北西部には様々な草が生えた砂浜とビロー（クバ）の丘による美しい景観が開けているが、ここに新たに整備された道路の山側に中南米原産のセントオーガスチングラスが植えられている。道路建設時に植えられたのであろうが、砂浜にはこの種に替わる在来の沖縄芝（沖縄産のコウシュンシバに対する呼称）、コウライシバ、クロイワザサが青々と生えている。

新石垣空港での雑草駆除に年間 5000 万円が使われていると聞いたことがある。もしここに沖縄芝が植えられて、適切に管理されていたら、維持経費が大幅に節減できただろうと推測される。沖縄芝は海浜植物で耐乾性と耐塩性に優れ、草丈が低いため、公園、緑地、空港等での植栽に適している。海に近い学校の運動場にしばしば植えられているが、長期間安定に維持されている。コウシュンシバが公共工事の植栽候補種として植えられ、適合性が調べられることがあるが、運動場での聞き取り調査を十分にすれば、適合性の調査を軽減できるかもしれない。

公共な施設とも言えるアウトレットモールあしびなー、イオンモールライカムの植栽柵にはそれぞれアメリカハマグルマとランタナ（シチヘンゲ）が植えられている。前者は緊急対策外来種であり、後者は重点対策外来種である。両種は繁殖力が旺盛で生態系への負荷が懸念され、駆除が求められている。個人の庭のこととなるが、ランタナがしばしば植えられている。果実が鳥によって散布されるので、開花後の摘み取り等が必要であろう。

前記の公共の場での植栽は、過去の植栽方法を踏襲したために起こったと推測されるが、植栽に関わる方には候補植物がどのような性質を持っているか前もって十分に検討して頂きたい。ただ単に安価である、見栄えが良い、調達が容易といった理由での選定は避けるべきである。選定した植物によっては、長期的に管理経費が膨大になる、生態系に負荷になるといったことが生じかねない。

一方、公共工事等で在来植物を植栽しようとしても、これができ難いのが現状である。在来植物の種苗の入手が困難な場合が多いからである。この課題を克服するには、各島で、島に自生する花木、芝等を常に栽培して確保し、利用する以外に方法はない。沖縄芝を確保した際には、確保自体が緑地としての役目を果たすが、ここから張り芝用の苗を切り取れば、これを他の場所に利用できる。どの島にも植栽候補となる在来植物は多

数あるが、これらは環境教育の教材となり、亜熱帯の特徴を示すものとして観光にも役立つ。